学生たちの感想文から

学生たちは毎晩、一日のスケジュールを終えてから日記形式の感想文を書き、第 25 回訪日の記録とした。以下、その一部を紹介する。

日　付： 11月26日（火）【1日目】
大学名： 北京大学
氏　名： 張力丹

今日は訪日初日、飛行機が雲を突き抜け広々とした海原が視界に入ったその時、私は初めて異国の地を訪れたという実感が湧いた。雨が降ったばかりの曇り空の下、私たちは日本航空の整備工場を訪れた。そして工場見学の前に私たちはまず日本航空のスカイ・ミュージアムにおいて羽田空港の概況や日本航空の発展の歩みについて理解を深め、さらにシミュレーターによる飛行機操縦を体験した。

その後整備工場に足を踏み入れると、まず見えたのは沢山の足場に囲まれた飛行機の機体であった。スタッフの紹介によると、足場を組むことで機体への出入りや様々な場所でのメンテナンス、さらには客室頂部の WiFi 装置の検査がしやすくなるとのことであった。整備工場内はとても広く、沢山の足場があっても狭苦しさは感じられなかった。その後私たちは第二工場を訪れたが、そこには整備待ちの飛行機が 3 機停泊していて、さらに駐機場に通じるゲートがあった。私は飛行機の真下に立って初めてその大きさと、整備スタッフの仕事の大変さを感じることができた。そしてゲートからは飛行機が離着陸する滑走路を目にすることができた。羽田空港は貨物取扱量が非常に大きく、2, 3 分に 1 機の割合で飛行機が着陸する。私たちはその中で中国の航空会社の飛行機も目にした。

日本航空の整備工場の見学を終えた後、私たちは飛行機で大阪に向かった。伊丹空港は規模こそさほどでもなかったがデザイン性がとても高く、温かみを感じる照明の他、ソファエリアがあるなど、中国国内の空港に比べより庶民的な感じがした。そしてエスカレーターを乗り継ぎ、私たちは旅客ターミナルエリアを離れた。

夕食は、1970 年の大阪万博会場近くのホテルでのビュッフェであった。ホテルのロビーはとても静かで皆は声を抑えておしゃべりをした。また東京から大阪に向かう機内でも大声で話をする人はほとんどいなかったが、これは日本人が他人に迷惑をかけることを嫌う民族であることと関係しているのかもしれない。

今日一日を通じて、スタッフの皆さんは私たちにとても友好的でまた親切であった。整備工場では、スタッフの皆さんが笑顔で会釈をしてくれた他、私たちがその場を離れる際には私たちのバスが視界から消えるまで手を振ってお別れをしてくれた。

日　付： 11月26日（火）【1日目】
大学名： 北京師範大学
氏　名： 郭蓓蓓

日本航空の飛行機に乗って 3 時間、中国の首都北京から日本の首都東京に到着した。この 3 時間のフライトでは、搭乗から到着まで、日本航空のサービスの細やかさと素早さ、規則的な処理、フライトの快適さが融合する様を体験することができた。

東京から大阪に移動するまでの数時間の間、私たちは日本航空の整備工場を見学することができた。そこでは日本航空のスタッフから温かい歓迎を受け、さらに空港の敷地面積、規模や設備、旅客輸送量等を含む基本状況の紹介の他、ビデオ形式での各業務スタッフの職務や業務内容等の紹介があった。そして 40 分間の休憩時間で私たちは工場内部の展示エリアを自由に見学した。フライトアテンダントの制服を試着したり各展示エリアをじっくりと見学したりすることはできなかったが、それでも展示エリア内の文字や展示品からは日本航空の発展の歩みを知ることができ、多くの部分でとても有意義に感じられた。例えば、日本航空はいかにして国営企業から民間企業に発展していっ

たのか、航空という交通方式はどのように一部の人から大衆向けに普及していったのか、さらに日本の航空産業全体の盛衰、日本航空の「鶴丸」マークの意味等について、個人的に多くの収穫が得られた。展示エリアではまた日本航空の関連グッズなどが展示されていて、それらはとても手が込んでいて収集的価値が感じられるものであった。

そして最も印象深かったのは整備工場現場の見学で、特に巨大な空間に入った瞬間はやはりとても衝撃的であった。そこではスタッフから飛行機の整備は年数ではなく飛行時間により行い、且つ 1 回のメンテナンスの時間やその費用も非常に高額であるといった飛行機のメンテナンスに関する知識の紹介があった。また倉庫の巨大なゲート前では飛行機の離着陸の全プロセスを目にすることができ、とても忘れられない体験となった。

日　付： 11月26日（火）【1日目】
大学名： 中国伝媒大学
氏　名： 袁嘉憶

今日の最初の目的地は羽田空港で、その次は大阪、そして最後は京都であった。一日通じての移動は疲れも感じたがそれでも充実していて、知らぬ間に私たちは一首都・二古都を訪れていた。だが何かしらの観光地を訪れたわけではなく、飛行機やバスの中でガイドの中島さんの解説を聞いただけである。移動の疲れと眠気の中、窓を通して日本という国の気候やリズム、日光と夜景を感じていた。

静かで秩序的というのが私のこの国への第一印象である。羽田空港では、チェックインやセキュリティのスタッフそして乗客は皆静かに微笑み、静かに食事をし、静かに待っていて騒々しい大声で話をする人はなく、その雰囲気に人は「声を出すのも憚られてしまう」が、正にこうした静けさが人を安心させ、秩序をもたらしているのである。忙しいながらも整然としている、厳しいながらもシビアではないというのが、私が感じたこの国の雰囲気である。

東京から大阪への乗り換えの間、私たちは日本航空の整備工場を見学し、飛行機の 1 回の離陸はどれほどのスタッフの協力により行われているかについて理解を深めた他、整備工場の壮観さを体感した。工場内では飛行機のメンテナンスの際の大きな物音を間近で耳にした他、飛行機の離着陸の様子を興奮しながら記録した。これらすべてに私たちは驚かされた。そして見学を終え整備工場を離れる際は、姿が見えなくなるまでお互いに手を振ってお別れをした。

夕食は大阪でとったが、そこはかつて 1970 年の万国博覧会の開催地で、今では現代的な様々な建物が密集していた。ここでの食事はとても素晴らしく、日本の食事の上品さに私たちは舌を巻くばかりであった。

初日の行動のほとんどは「飛行機」に関係していた。だが、「一花一世界（一輪の花でも一つの世界になる）」という言葉があるように、日本航空の飛行機への搭乗から整備工場の見学まで、飛行機を通じて見える日本国民の素養こそが私の日本に対する真の第一印象であった。

日　付： 11月27日（水）【2日目】
大学名： 北京大学
氏　名： 姜姍汝

この日の午前、私たちは京都にある Panasonic Design Kyoto を訪れた。ここでの活動は大きく分けてデザインされた商品の見学とデザイン体験の 2 つであった。展示品の見学では茶筒からインスピレーションを得た防音スピーカーや自然な微風を生み出す扇風機、そして樹脂を原材料とした吊り天井等を目にした。これらの商品はスタイルが美しく、生活からそのほとんどのインスピレーションを得ていて、実用性とデザインの美しさを巧みに融合させていた。そして団員らの「弁当」のデザインのコーナーでは、私たちは 5 つのグループに分かれ、それぞれ特徴的な弁当のデザイン 5 つを完成させた。パナソニックのデザイン担当スタッフからはデザイン業務の基本的な流れについての紹介があり、その中では「簡単に否定しない」、「使用者の視点に立つ」、「具体化をする」等の原則が示されていた。

これには団員らも大きな刺激を受けた。これまで自分たちが受けてきた教育方式を振り返ると、革新性は常に取り上げられてきたが、その実用的また効果的な実践方法がなかったのではないか。私たちはパナソニックの「設計工房」式の革新モデルを学び取り入れるべきではないかと感じた。

午後、私たちは著名な京都大学を訪れた。京都大学と私の通う北京大学はそれぞれ 1897 年と 1898 年に創立されていてほぼ同年齢の 100 歳を超える大学である。京都大学の見学では、両大学に共通する部分と異なる部分が感じられた。共通しているのは、両大学とも世界でも一流の教師と学生を抱え、世界に向けて次々と人材や学術的成果を提供している点で、異なるのは、京都大学は北京大学よりもリズムがゆったりとしている点である。北京大学では教授らは常に多忙を極め、効率的に学術的成果を生み出しているが、京都大学の教授らはじっくりと生涯をかけて一つの研究を行っている。それは教授らにとっては外界からのプレッシャーが和らぐものであり、それにより周囲に流されることなく自分独自の考えを持ち続けることができる。その他、私自身も多くの京都大学の学生と知り合ったが、彼らの授業のカリキュラムは私たちほど詰まってはおらず、試験勉強といったこともほとんどない。その一方彼らは私たちよりも多額の学費負担をしており、空いた時間のアルバイトも一般的である。両大学の違いに私は多くを考えさせられた。これから先、両国のより多くの学生が互いに交流できる機会が生まれることを願っている。

日　付： 11月27日（水）【2日目】
大学名： 中国伝媒大学
氏　名： 鄭博航

朝はまずホテルで朝食をとったが、これは京都での初めての朝食であった。とても豪勢な食事だったが、中国と違うと思ったのは炊いたご飯と調味料を混ぜて食べるところで、一般的に中国国内では朝食にご飯はほとんど食べない。

朝食の後 Panasonic Design Kyoto へ向かった。印象深かったのはパナソニックが生み出したコンセプト商品は家電製品である以上に芸術品であるという点であった。日常の生活から始まり、茶を楽しむ、お酒を飲むといったことについてパナソニックは科学技術によりそれらをより便利にまた快適にしており、外観的にもこれらの商品のデザインはまた非常に優れていた。生活に必要な家電製品以外にもパナソニックは生活の質を高める製品を提供していた。心が落ち着いた時にだけ発光するライト、音楽をさざ波に変えることで聴覚を視覚に変える、これらはいずれもギャラリー内の芸術品のようであった。

またパナソニックではグループに分かれ弁当のデザインを体験した。その際私は台上でのプレゼンを行ったが、この日私はさらに京都大学でもプレゼンを行った。グループ内の日本人学生は日中関係における双方への印象や見解を討論のテーマに選んだが、これはとても大きくまた重いテーマであった。討論が終わりに近づいても私たち学生の視点からではこれらの問題への良い解決策は見つからなかったが、それでも私たちは互いに意思疎通をし、短い時間ながらも互いの見解について実際に知ることができた。

日　付： 11月27日（水）【2日目】
大学名： 中国伝媒大学
氏　名： 袁嘉憶

この日の午前、私たちは Panasonic Design Kyoto を見学した。9 階のバルコニーから京都の街を見下ろすと、通勤する人々や車が絶え間なく続き、ドラッグストアの看板が色鮮やかで、京都タワーが遠くに聳え立っていた。そうした景色を高いところから見ていると視野が広がり心も広くなった。パナソニックのデザイナーの多くもこうした景色を見て優れた作品を生み出しているのかもしれない。私たちはそうしたデザイナーによる展示品の一部に実際に触れることができた。密封性の優れた茶筒からヒントを得た、ふたを開けると音が聞こえ、閉じると音が消えるスピーカー；金銀の絹糸で作られ、触れる位置の違いにより異なる音が発するスピーカー；平衡に持った時にだけ光を発する香炉等、私た

ちはそれらの完成品を体験したが、その理念については推して知るべしである。これらの「芸術品」から私たちは現代と古典、芸術と技術の融合を見た。私たちはさらにワークショップに参加し、弁当のデザインを通じて 1 つのアイデアの発生から実物への応用そして生産ラインまでのプロセスを体験することができた。こうしたプロセスから私はデザインとは単純なものではなく、その背後にはユーザープロファイルの構築、基礎原理の運用そして製品に磨きをかけるための批判的思考が存在していることを知った。

午後、私たちは日本の著名学府である京都大学に向かった。大学の規模自体は特に大きいというわけではなかったが、その景観はとても素晴らしかった。キャンパス内ではたびたび自転車に乗った学生が寮や講義棟また図書館等を行き交う様子を目にした。京都大学の学生の案内の下、私たちは歴史展示室等キャンパス内各所を見学し、その後京都大学の学生を交えてグループ討論をした。私たちのテーマは「環境保護」で、京都大学の大学院生の指導の下、私たちは二酸化炭素排出量に関する日中両国の各次元における比較を行い、「中国有価責任」、「日本有価責任」及び「日中有価協力の可能性」について討論し、最後にアインシュタインも訪れたことがある講堂で討論結果の発表をした。京都大学の学生は人間性や言語的素養また学術的素養のいずれもとても優れていて、私たちは今回の討論を通じて友情を育むことができた。交流には両国の学生の相互理解を大きく促進する作用があり、たとえ一回のプレゼンテーションでも、率直に交流し、力を合わせれば、大きな成果が得られることを私は知ることができた。

日　付：11月27日（水）【2日目】
大学名：外交学院
氏　名：張烱琪

午前は Panasonic Design Kyoto の見学であった。多くの人と同様に私のパナソニックへの印象は従来の家電大手というものであったが、今日はパナソニックの別の一面、つまりデザインへの探求という一面を目にすることができた。

見学の際に印象深かったのは、作業部屋の配置と二つのデザイン商品であった。作業部屋に関しては、自由な討論ができるスペースや仕切りが付いた個人用の作業スペースがあり、その他には各作業チームの討論の様子が見える透明な会議室が複数あった。創意を求める企業には、その設計において必然的に「個人」と「グループ」の自由な切り替えと融合を考慮することが求められると思う。またデザイン的には「自然な風をもたらす扇風機」と「心の落ち着きを求めるランプ」が印象深かった。これらからは自然のそよ風を感じ、心が落ち着きまた雑念がなくなった。こうしたデザインは自然と人の心からインスピレーションを得ているものである。

その後は京都大学を訪れた。京都大学の建物は洗練されているというわけではないが、シンプルで年代が感じられた。私が参加した討論のテーマは日中両国の人々の人生観であった。価値観の違いについて皆は大いに討論をし、それぞれの意見を記録した。印象深かったのは、ある京都大学の学生の話の中で、日本に向かう機内で中国人がとてもうるさかったが、帰国の際には疲れたのか一言も発していなかった。普段日本人は中国人の素養が比較的低いと見ているが、実のところそれは日本に向かうことへの一種の興奮の表れであり、日本の高度成長時代にも同様のケースが存在していた、というものであった。私はこの発言から賞賛すべき理解というものを感じた。

日　付：11月28日（木）【3日目】
大学名：北京大学
氏　名：王遠非

今日は訪日 3 日目である。昨日は Panasonic Design Kyoto と京都大学を見学したが、今日は企業や学校の見学はなく、朝私たちはバスで嵐山に向かい周恩来総理の記念碑を訪れた。ちょうど曇りで小雨も降るなど周総理の『雨中嵐山』の朗読にふさわしい天気だった。現在は紅葉の季節で、黒みがかった赤色の嵐山は小雨の中でひときわ美しく、傍を流れる川は底が見えるほど透き通り、遠くの渡月橋が両岸に架かる様は素晴らしい景色を作り上げていた。

その後、私たちは高台寺に向かい座禅と茶道を体験した。靴を脱ぎ禅室に入るとそこには赤い座布団が 4 列に並べられていた。禅師の指示に基づき私たちは座布団の上で胡坐をかき、背筋を伸ばし、丹田で呼吸をし、呼吸に神経を集中させた。これは一見簡単そうに見えるが、本当に神経を集中しようとすると逆に脳内に様々な考えが浮かんでくる。だがこれは集中力を鍛える良い方法である。次いで茶道の体験となった。先生からは茶のたて方の紹介と茶を飲む際の手順の説明があった。亭主は茶碗を置く際、茶碗の正面を客に向けるため、客は茶を飲む前には必ず左手を茶碗の底に添え、右手で茶碗を半周回し茶碗の正面を亭主に向けなければならず、飲み終えた後は口が触れた部分を拭き取り、完了となる。茶道は中国発祥だが、日本において今日まで受け継がれている。日本の茶道を通じて中国の伝統文化を感じるというのはまた違った体験であった。

高台寺を離れた後、私たちは新幹線で小田原に移動し箱根に向かい箱根湯本温泉の天成園に宿泊した。夕食は豪勢な会席料理で、懇親会では私は司会者の一人としてアナウンスを担当した。各学校とも出し物を披露したが、特に北京師範大学の学生達はとても張り切り歌を 3 曲披露した。懇親会終了後は温泉の時間となった。冬に野外で温泉に浸かるのは一種の贅沢であり、全身の筋肉がリラックスし、ここ数日の疲れを完全に取ることができた。

楽しい一日が終わり、私たちも気持ちを整えこれから先の日程に備えなければならない。明日はソニーと三菱商事を見学するのでとても楽しみにしている。

日　付： 11月28日（木）【3日目】
大学名： 北京師範大学
氏　名： 郭蓓蓓

あっという間に訪日も三日目となった。これまでの二日間の慌ただしい日程に比べ、この日は本当の意味での旅行そして観光となった。京都を訪れたからにはその風光や寺院には触れざるを得ない。周恩来総理はかつて 1917 年に学問のため日本に渡った。そして帰国の前に京都を訪れ、白話文で書かれた詩を四首残した。その後 1979 年、京都の日中友好団体や著名人による提唱の下「周恩来詩碑建立委員会」が設立され、そして同年 4 月 16 日に詩碑が完成した。そうした中、今回嵐山を訪れるということで私たちは周恩来総理の詩碑を見学した。詩碑は嵐山や大堰川に向かっており、様々な樹木に囲まれ、詩碑に刻まれた詩句の内容は周囲の風景と一致していてとても美しかった。

嵐山を離れた後、私たちは高台寺に向かい、浄音法師の指導の下で座禅と瞑想を体験し多くの収穫を得ることができた。茶道は中国発祥だが、中国では普及されず日本においてそれらが完全に受け継がれていた。私たち一行 30 人は茶のたて方から出し方さらに飲み方まで一連の流れを体験したが、それら各所作に対する要求の細かさや正確さ、技術的また経験的な要求の高さから、こうした細かな手順を完全に受け継いでいる民族はきっと真面目な民族だと感じたが実際その通りであり、機内の乗務員や空港のスタッフであれまたはホテルのスタッフやフロント、ひいては企業訪問時の対応・紹介担当者そして私たちの乗るバスの運転手であれ、皆いずれもこうした真面目また細やかで責任感のある姿勢で仕事に向き合っていた。

そして新幹線での 2 時間余りの移動の後、箱根湯本温泉の天成園を訪れ、会席料理を堪能し各大学による出し物を楽しんだ。その後は露天風呂に浸かり一日の疲れを癒し、元気一杯にそして気持ちも新たに新しい一日を迎えた。

日　付： 11月28日（木）【3日目】
大学名： 北京師範大学
氏　名： 張競文

今日の日程は最初の 2 日間とは異なり、主に日本文化を体験するというものであった。

午前はまず京都の有名な観光地である嵐山に向かった。紅葉も終わりを迎える頃ではあったが、色とりどりの嵐山は依然として美しかった。赤、黄、深緑の葉が混ざり合う様子は遠くから見ると立体感があり、近くから嵐山の紅葉を

見ると中国のそれとは違い、小さくまた優美で、色もより赤く鮮やかながらも純朴な味わいがあった。嵐山の周辺の自然環境は非常に良く守られていた。鴨川からは川床に多くの鳥を見かけるようになり、水中でも大きなナマズを見かけた。しかし残念ながら散策の時間が短く嵐山の景色を完全に堪能することなく駐車場と周総理の詩碑を往復しただけであった。

次いで高台寺で座禅と茶道を体験した。不思議に感じたのは、日本の禅は古代中国から伝わったものをそのまま残しており、法師が身に着けているものも当時の様式の服装であったという点である。座禅においては心を落ち着かせ集中を高めるために香を焚く。しかし私は心を落ち着かせることができず、また我慢や集中力も足りず、呼吸に集中することも姿勢を維持することもできなかった。座禅終了後、法師からは現代の若者の集中力は次第に低下しているとのお話があったが、私自身そうした問題があることを痛感し、早急に改めなければと思った。座禅の後は茶道を体験した。茶道については思っていたほど繁雑ではなく、茶道具の清めや茶をたてるといった一連の手順で最低でも 30 分はかかるのかと思っていたが実際には 10 分程度で済んだ。だがそれは披露したのが「茶をたてる」という内容だったからで、また茶道の紹介がしやすいように一部の手順を簡略化したからかもしれない。茶の味は中国の茶とはとても異なり抹茶の味であった。茶道は優雅、端正そして落ち着いたものであり、機会があれば私も学んでみたいと思った。

夜は箱根湯本温泉の天成園での温泉体験となった。浴衣を着るのは初めてではなかったが、浴衣の美しさには毎回感心してしまう。会席料理はとても豪勢で、1 つの料理は少ないがすべてを合わせると食べきれないほどの量であった。各料理にはそれぞれ決まった食べ方があり、日本文化の細やかさに驚かされた。また食材や料理はいずれも素晴らしかったが、一部どうしても口に合わず食べられないものもあった。懇親会はとても楽しかった。その後は温泉に浸かり、露天風呂から山間の滝や神社が作り出す景色を堪能した。温泉の温度は温かく常にお湯が流れ込みとてもきれいだったが、長く浸かりすぎると胸が苦しくなった。

夜は畳の上で眠り、畳が日本人を「落ち着かせる」との気分を多少味わうことができた。

日　付： 11月28日（木）【3日目】
大学名： 中国伝媒大学
氏　名： 任光建

“稍習夏音，悪倭名，更号日本，使者自言，因近日出，以為名。”「後稍夏音を習い、倭の名を悪み、更めて日本と号す。使者は自ら言う、日の出ずる所に近し、以って名と為す。」

―『新唐書・日本伝』

八大洲から「夏音を習う」そして「日本」に至るまで日本文化の血液中には多くの中華文明の遺伝子が存在している。「建築」、茶道、座禅これらの馴染み深い民族文化が東に伝わり装いを変えた。当初私は座禅体験については嫌であった（なぜ座ったまま時間を浪費するのか、別のことを体験するのはだめなのかと理解できなかった）が、実際に目を閉じて「修行」を始めた瞬間、スマホを持たず、何も考えず、じっと座り、呼吸を整え、心身のバランスを図ると一種の「自然に帰った」感覚が流れ込み、心が穏やかになり落ち着いた。以前チェックしていたブロガーが座禅を紹介しそれを勧めていた。私たちには高僧のような知恵はないが、少しの時間を利用して生活における知恵を見つけまたそれを感じても良いと思う。

茶道の体験においては、こんなに複雑にして疲れないのかと思った。紹介を受けた後、もし自分がお茶を飲むなら絶対にこのようにはしない。一杯のお湯に茶の粉末を入れてかき混ぜればそれでよく、そんなにのんびりしていられない。自由気ままが自分の人生哲学だと思っていたが、考え直してみると、茶道の広まりにもその理由が存在し、茶道の全体的なプロセスはゆったりとしていて慌て乱れることがなく、やすらかな気持ちで生活と向き合い、また生活を営むものである。

全体的に、日本の文化は静かであり、慌て乱れることなくやすらかな気持ちで生活を営み、生活に儀式感を加えることで生活を真の生活に変えている。

ところで嵐山の魚はお化けかと思うほど本当に大きかった。また天成園の温泉からは『千と千尋の神隠し』の気分が味わえた。山里、河の流れ、浴場に通じる橋、浴場ひいては後ろの山の魚もあり、それなら自分もハクになり、生活を営み、自らを癒そうと思った。

日　付：11月29日（金）【4日目】
大学名：北京師範大学
氏　名：桂嘉雨

午前に訪れたソニー株式会社は極めて現代的であると同時に非常に壮観で衝撃を受けた。そして解説スタッフによるソニーの各製品への踏み込んだ紹介に伴い、8K ディスプレイ、センサー技術、スマホによる映画レベルの画像撮影、騒音抑制効果が高くまた随時外の音を聞くことができるイヤホン、12 台のスピーカーとメインボーカル、コーラスを分ける技術により臨場感の高い聴覚効果を作るなどこれらの体験はとても印象深く感じられた。まさにソニー株式会社の「We pioneer the future」との理念のように、彼らは未来の生活の方向性を決定付けており、最新技術により科学技術のさらなる可能性を私たちに示し続けている。馬女史による一中国人としての日本企業での勤務に関する紹介もまた非常に貴重で、私はその中から企業内部の団結力を強く感じた。

午後に見学した三菱商事は全体的なスタイルとしてソニーとは大きく異なっていた。三菱商事は実践的、シンプル、てきぱきとしていて同様に印象深かった。同社での紹介において最も興味深かったのは女性の活躍関連の取り組みだった。一女性として私は現在の就職環境において女性は様々な障害に直面していることを知っている。これは女性の就職率、職位のランクや経営陣の比率が男性よりはるかに低いことに影響するだけでなく、女性の恋愛・結婚や出産への観念に深く影響し、自発的ではない晩婚・高齢出産ひいては不婚・不出産をもたらしている。三菱商事が行っているのは、まさに女性職員の性別により生まれやすい様々な不安の解消であり、全面的なサポートにより安心して仕事に打ち込み、自身の価値を発揮できる環境を作っている。また女性職員に対して出産面での優遇措置をとると同時に男性の状況についても考慮し、男性の利益にも配慮するなどこうしたヒューマニズムや措置はとても印象深かった。

夜は社員の皆さんと心行くまで交流を楽しんだ。皆さんとても若く能力があり、実際にお話をした二人については、一人は京都大学出身、もう一人は東京大学出身で数ヵ国語に精通していた。私は日本での就職に関する疑問について彼らに尋ね、詳しい回答を頂くなど沢山の収穫を得ることができた。

日　付：11月29日（金）【4日目】
大学名：北京語言大学
氏　名：税金妹

今日はソニーと三菱商事という日本を代表する企業を訪問し、多くの収穫を得ることができた。ソニーそして三菱商事のいずれも私の日本企業への従来の印象を打ち破るものであった。これまで私は、日本企業は改革やイノベーションを追求せず、規律を守るだけで、企業固有のモデルやしきたりによって運営していると思っていた。しかしソニーや三菱商事の見学を終えて、私は初めて企業の長年の運営を支えているのは企業の核心的理念の伝承と継続そして時代の変化に対応した改革やイノベーションであることを知った。ソニーはこれまで常に科学技術により世界を感動させるとの企業理念により、当初の「Walkman」等の電子機器から映画等の様々な分野での事業において時代の変化に対応し絶えず新たな事業モデルを開拓してきた。三菱商事もまた時代の変化や経済のグローバル化といった世界的な現状に対応し、絶えず企業の構造転換を行い、次第に貿易、投資、金融、物流、情報等が一体となった多角的企業に発展していった。

その中で印象深かったのは三菱商事の福利制度と社会への貢献であった。世界的な大企業である三菱は積極的

に自らの社会的責任を担い、また会社の福利制度を整え、特に女性の権益の保護に注力しているが、これは中国国内の企業では珍しい。また同社は社会公益事業に積極的に参加をするなど、世界的大企業としての姿を私たちに示していた。

今日の日程はとても有意義で日本の世界的大企業が持つ変革の精神そして彼らすべての従業員の細やかで丁寧な勤務態度、さらには大企業として負うべき社会的責任等について体感することができた。

日　付：11月29日（金）【4日目】
大学名：中国伝媒大学
氏　名：江篠芊

最先端を行く日本企業：ソニー＆三菱

賑やかな東京の雰囲気は京都とは全く異なっていた。東京での初日はソニーと三菱商事を訪問したが、全体的に多くの収穫があり非常にためになった。

ソニー：メディア業界人にとっての「大手メーカー」であるソニーはその地位や評判は非常に高いが、私にとってかつて同社はマジックリアリズムによる産物であり、人類の前進を牽引する指針であった。だが見学の後私のそうした認識には変化が生まれ、感動的な 70 周年の PR ビデオからは同社の温度が感じられた。そして世界中に広がる拠点からはグローバル化の高さを感じた。さらに馬女史に専門的な質問をして新たな知識を獲得すると共にソニーのこれまで以上に明るい先行きを垣間見ることができた。同社のイノベーションはこれからも人類を牽引すると確信している。

三菱商事：三菱グループ内の一企業としては非常に規模が大きく、国内外合わせて 8 万人もの従業員を抱えている。長い歴史を持つ三菱は流石に日本の「大財閥」であり、世界の貿易やグローバル化に大きな貢献をしている。私が最も感心したのは三菱の強大な生命力であり、絶えず経営体制を変え多くの企業を吸収し、事業分野を拡大し、多様化を許容するといった措置を通じて、特に女性従業員に対して優遇措置やヒューマニズムに富んだ配慮を提供していることは、同社が常に成長を続け、また多くの困難（1990 年代のバブル経済、2008 年の金融危機）を乗り越えられた原因だと思う。

私は三菱商事の女性従業員への優遇措置に特に関心があり、深刻な少子化の現在の日本においてこうした措置は雪中に炭を送るかの如く、女性の労働や育児の二重の負担を解消するものだと思う。人事部の中西佐和子女史や金属資源本部の福田圭馬氏への質問を通じて、私はこうした措置の実施の背景、経過、申請方法及び評価について知ることができた。将来的に中国においてもこうした取り組みが実施され、女性の昇進における「天井」や求職時の男女差別を打破することで、女性の労働や育児が整然と同時進行することを願っている。

日　付：11月29日（金）【4日目】
大学名：外交学院
氏　名：劉益琪

創意と科学技術の力で世界を感動させる、これはソニーの創業当初からのモットーである。日本の長寿企業は非常に多く、私は今回の企業訪問の機会を借りてその秘訣を探りたいと思っていた。私たちは今回直に Xperia シリーズのスマホ、360 度サラウンドサウンド、VR 技術等の「先端技術」に触れた。ソニー全体での生活レベルの向上や人々の生活における記念作りへの科学技術の応用という点については特に印象的であった。「私たちは、人々がソニーの製品を使う際、後になってこの製品自身のみならず、私と私の親や友人がソニーのイヤホンで当時この曲を聴いていた、ソニーのプレイステーションでこのゲームをしていたと思い返すことを願っている、これが私たちの追い求めるものである。」科学技術は本来人類と密接な関係にある事業に活用されるべきであり、私は人たるものとしてもこうあるべきで、広い心を持ち、必要な時には謙虚に他者と協力し、長所を取り入れ短所を補ってこそ先々までの発展を求め

ることができると思う。

午後私たちは三菱商事を訪れた。同社からの企業の発展の歩みについての紹介の際、印象深かったのは何度も登場した「SDGs」という言葉であった。企業の長期的発展は、名利のために手段を選ばない、自分の利益だけを考えるといったことでは実現できるものではなく、長期的視野に立ち人類全体を思ってこそ新天地が開けるのである。その後陽が沈み三菱商事での懇親会が始まった。今回の懇親会には私たち訪日団一行の他、中国での勤務経験のある同社の多くの従業員も参加した。私たちは食事をしながら楽しく交流を図った。三菱商事の東アジア地区の代表は、彼らは社内で「中国通」を自称しているが、私たち中国人から見れば中国について何も知らないと感じるかもしれないと彼らをからかっていたが、少し話をして私は彼らが完全に中国通の呼び名に相応しいと感じた。私が湖南省出身だと言ったところ、彼らはすぐに「不怕辣、辣不怕（辛い物を好む、の意味）」といったことわざを口にできるほどであった。またその中の一名からは香港の騒乱に関してアメリカが法整備をしたことについて質問を受け、私は、これは中国の主権や内政に関わる事柄でありアメリカとは何の関係もないと単刀直入に答え、その人も頷きながら私の回答に理解を示してくれた。私は、すべての外国人が西側諸国の虚言に騙されるわけではなく、特に情報が溢れる現代においては、自ら考え、立場をはっきりとさせることはとても得難いことだと思っている。

日　付：11月30日（土）【5日目】
大学名：北京師範大学
氏　名：肖瑾

今日はホームステイの日である。多少緊張しながらロビーでホストファミリーからの迎えを待っていたが、団員達が次々と出発していくのを見ていると私も次第に焦りを感じ始めた。それから間もなくして私のホストファミリーの三隈さんが迎えに来てくれた。資料では三隈さんと奥さんには 2 歳と生まれたばかりの 2 人の娘さんがいるとのことであった。私たちはその後車で中央区の三隈さん宅に向かった。到着すると、三隈さんの奥さんと娘さんが私たちを迎えてくれた。その後の自己紹介で奥さんの名前は順子さんだと知った。順子さんが昼食の支度をしている間、私は三隈さんや娘さんとリビングでおしゃべりしたり遊んだりした。上の娘さんはちょうど元気いっぱいでまた可愛い年頃で、何に対しても好奇心や元気に満ち溢れていた。この点については中国の子どもと同じであった。昼食はちらし寿司とナスやレンコン、ピーマン、大根などで作った野菜料理であった。そして食後には都内観光に向かった。

東京はいつでも人が多く、私たちが浅草寺に向かった際も周辺には沢山の観光客がいたが、それは日本国内のみならず、外国からの観光客も沢山いて、浅草寺の散策では様々な国の言葉が聴こえてきた。浅草寺でお参りをした後はおみくじを引き、私は「吉」を引き当てた。浅草寺には多くの食べ物が売っていて、私たちはさつまいもとカレーパンを買った。そこでさらに私は親戚や友人へのプレゼントを買った。

次いで秋葉原に向かった。三隈さん夫婦はまた夕食の準備を始めたが、それはすき焼きだった。三隈さんは私に日本料理を味わってもらうためにわざわざすき焼きにしてくれたようだった。今日は一日本当にお世話になったが、日本の家庭料理を味わいさらに街中を散策できてとても嬉しかった。

日　付：11月30日（土）【5日目】
大学名：北京語言大学
氏　名：林龍玉

今日はホストファミリーのお子さんが通う学校の創立 60 周年の記念日とのことで、早くに起きてホストファミリーの迎えを待ち、その後小金井市へ向かった。出発前に笹原さんからは今日のような日は日本人にとって重要な日と伝えられたが、正にその通りであった。その多くが 10 歳にも満たない子どもだったが出し物はとても素晴らしくレベルが高かった。それらが終わった後やっと澄川さん一家と挨拶を済ませることができた。

昼はお子さん達がリラックスできるようにと彼らが好きなレストランで食事をとった。初対面ではあったが澄川さん一家はとても親切でよそよそしさは全くなかった。お子さん達はいずれもピアノを習っていたため、食後は息子さんをピアノ教室に送り届け、奥さんが付き添い、私と澄川さんそして娘さんは書店で彼らの戻りを待った。日本の本はその多くがコンパクトで持ち運びし易いが、値段は比較的高かった。その後息子さんが戻り、スーパーで夕食の買い出しをした。

スーパーは澄川さん宅から割と近く、歩いていける距離であったが、出かけた時には空は完全に暗くなっていた。そうした中、息子さんが突然お母さんとしりとりゲームを始め、私も自然とそれに加わり 5 人でゲームをすることになったが、その瞬間、自分がまるで彼ら家族の一員で、澄川さんの娘また兄妹達のお姉さんであるかのように感じられた。

澄川さんは関西人であったため、たこ焼きを手作りしてくれた。それはとても特徴的で、私は初めて「えび焼」（たこをえびに変えたもの）というものを食べたが、とても美味しかった。食後はお子さん達とゲームをするなど皆で楽しい時間を過ごした。

日　付： 11月30日（土）【5日目】
大学名： 北京語言大学
氏　名： 黄徳発

たとえ日本で留学をしている人でも日本の一般家庭での生活を体験できることはほとんどないと思う。この日の朝 9 時、私たちは家族の迎えを待つ幼稚園児のようにホストファミリーからの迎えを待っていた。

坂井さんの姿を目にするまでは本当に落ち着かず、ホストファミリーの皆さんはどういう人なのか、これから二日間のホームステイでいざこざが起きたりしないか、互いに言葉の問題でうまく交流できないのではないかなど色々な心配があったが、実際に坂井さんと会ってからはそうした心配は無用であったと感じた。坂井さんはとてもフレンドリーながらも礼儀正しく程良い距離感を保ってくれた。とは言え、私は坂井さんとの交流が深まるにつれ、初対面では話しづらいような話題についても自然と話をするようになり、それにより私たちの関係はさらに深まった。

朝は森美術館で東京を一望し、その壮観な景色を堪能し、昼は一蘭で汗だくになりながら 5 倍の辛さのラーメンを食べそしてビールを飲み、午後の浅草寺では坂井さんから参拝の仕方を教わった。また夜の六義園では楓の景色を観賞し居酒屋で焼き鳥を食べながらいろいろな話をした。言葉が完全に通じるわけではなかったが、互いの心の交流は何の障害もなく続いた。国には境界があるが、心には境界というものは存在しないのである。

それは正に、私が坂井さんと会った時に述べた「日本語がうまくないので何か失礼な部分があった際はお許しください。」という言葉への、「心を通じ合わせることが交流であり、言葉自体はさほど重要ではない。」という坂井さんの回答と同じものであった。

日　付： 11月30日（土）【5日目】
大学名： 中国伝媒大学
氏　名： 王一夏

キヤノンの社員である野津智史さんは、11 月 10 日から私のためにスケジュールやプランを練ってくれていた。二人のお子さんもとても可愛く、私の心は癒された。

川崎市の藤子 ·F· 不二雄ミュージアムは私がずっと行きたいと思っていた場所の一つであった。私は、天真爛漫さはどの年代にも必要不可欠なものだと思っている。私にとってドラえもんは真に力や感動をくれる作品であり、私の心を宿命論という泥沼から救い出し、未来は変えられることを気付かせてくれたのはドラえもんであった。また誠実であることの素晴らしさを教えてくれたのもドラえもんであった。ミュージアム内で私は野津さんとドラえもんの歌を歌ったが、この時私は、優れた文芸作品は両国の人の心をつなぐ大きな力になるということを強く感じた。

海老名市の野津さんの御宅では初めて手巻き寿司を食べ、その美味しさは後でまた食べたいと思うほどであった。

その夜の交流は 4 時間ほど続き、色々なテーマについて意見交換をしたが、その際野津さんの奥さんからは「よく知っているね」と驚きの声があがっていた。その他内容的に難しいものについては互いに漢字に書いて交流を行い、その量は 6 ページにも及んだ。いずれにしても漢字文化圏に属する互いの交流はとても楽しいものであった。

日　付： 12月1日（日）【6日目】
大学名： 北京大学
氏　名： 姜姍汝

今日はホームステイの 2 日目で、初日の活動を経て私たちはより気軽そして自然に交流できるようになっていた。ホストファミリーの御宅は戸田公園近くにあり、ヨット・ボート競技の練習場からも近かった。ホストファミリーからそこの風景がいいとお薦めされ、午前私たちはその風景を見に向かった。

そこはかつての東京オリンピック時のヨット・ボート競技の会場であった。開けた水域で、一本の堤防で隔てられ、もう一つの川は東京湾に向かって流れていた。また多くの大学がヨット・ボート競技に使用しており、この日の午前はちょうどいくつかの大学が練習をしていた。爽快な青空の下、学生達は一斉に声を出しながら絵画のような風景の中を進んでいた。その時私は寒い北京と寒風の中で凍える人々を思い出し、彼らを羨ましく感じた。

お昼、私は初めて日本の本場のカツ丼を食べたが、カラッと揚がった豚カツに卵と出汁が組み合わさり、一口食べると体と心が幸せに満たされた。

午後、長尾さんと私は東京国立博物館を訪れ、私はここで初めて日本の歴史について系統的に知ることができた。長尾さんからは丁寧な解説を頂き、また館内の展示品も華麗な着物や武士の鎧兜そして書道や絵画作品など様々で、中国文化の日本への影響そして中国文化がどのような継承や発展を通じて特徴的な日本文化を形成していったのかという点について知ることができた。

その日の夜は他の団員達と東京タワーを見学した。きれいな夜景に私たちは衝撃を受け、現代の都市を代表とする人類の文明はこの地球という星における奇跡だと感じた。

日　付： 12月1日（日）【6日目】
大学名： 北京大学
氏　名： 李書承

日曜日、私たち 5 人は銀座や江戸東京博物館そして皇居を訪れ、美しい景色を堪能すると共に私の観光の目的も達成することができた。ここではホームステイの 2 日間を通じた体験について述べてみたい。

学校での時間が長かったためか、生活とはどういうものなのか私はすでに忘れていた。だが今回のホームステイを通じて私はそうした長く忘れていたものを目にし、さらに思い出すことができた。ホストマザーはホストファザーと私のためにお酒やおつまみを準備し、子どもたちは粘土遊びをし、また床に寝そべってテレビを見ている。私とホストファザーは社会の現状やライフスタイルについて話をし、ホストマザーは話を聴きながら子どもの歯磨きをする。彼らは私という人間ましてや外国人が一人増えたことを全く意識していないようだった。そうした彼らの自然さに私は衝撃を受け、私はこれまで何を失ってきたのか？私が追い求めるもの、そのすべては何のためなのか？あらゆるものが慌ただしく過ぎていく一方で、静けさの中にも生命が潜んでいることを忘れていたと痛感した。それ以外にも、彼らが互いに支え合い共に歩んでいく姿に私はとても感動した。彼らはきっと互いを自分の生命の中で最も大切な存在だと認識しているからこそ相手のために進んで多くの時間や気力を使うのだと思った。

最後に私が彼らにプレゼントを渡す際、このプレゼントは北京大学の図書館に関連したもので、傍の文字は「勝ちたくはないが、それ以上に負けたくない」という意味で、この言葉には人生には様々なスタイルがあり、自分が究極の目標とする状態に必ず到達しなければならないということではなく、他人を害したり自分に対して無責任な選択をした

りしてはならないという意味が込められていると紹介した。だが私は彼らからこうした精神を見た思いがした。彼らには遠大な目標はないかもしれないが、仲睦まじく互いに支え合うことも素晴らしい生活だと思う。

彼らとの 2 日間で私は慌ただしい中に生命の輝きを目にしたような気がした。そして、それらはより鮮やかに感じられた。

日　付： 12月1日（日）【6日目】
大学名： 北京語言大学
氏　名： 黄鑫

今日はホームステイの 2 日目、朝起きてホストファミリーと挨拶を交わし朝食を食べた。朝食は海苔とおでんで、ホストファザーからは納豆をすすめられたが、あの味は正直なところ耐えられなかった。

午前はホストファミリーのお兄さんと秋葉原に向かった。秋葉原はアニメ愛好者が憧れる場所であり、もちろん私も行きたいと思っていたが今回その夢がかなった。その後家電のお店やアニメグッズのお店などをまわったが、ここは夢のような場所だと思った。それから暫くしてお姉さんが合流し私たちはゲームセンターで遊んだ。日本の UFO キャッチャーは中国のものよりも魅力的な商品があったが操作が難しかった。

お昼はラーメンとなり、私は定番の醤油ラーメンを食べた。麺は弾力があり、スープはコクがあったが少ししょっぱく感じた。恐らく日本人はしょっぱいものを好むのだろう。これは北京の食事が油が多いのと同じようなことなのだろうか。

その後に起きた出来事はとても感動的で強く印象に残った。私たちが秋葉原でラーメンを食べていた時、ホストファザーとホストマザーから電話があり、東京湾を周遊するチケットを取ったとのことで私たちはラーメンを食べた後に東京湾に向かった。観光バス内ではガイドからコースの紹介があったが、話すスピードが速すぎて私は全く聞き取ることができなかった。またこの観光バスは船に形を変え海の上を航行することができ、私たちは東京湾を遊覧したが、こうした体験は初めてだった。東京湾からは遠くに東京タワーやスカイツリーなど多くの建築物を目にすることができ、この国の美しさや豊かさに感嘆させられた。そして頭上をカモメが飛んでいく様子に心はとても清々しくなった。

午後にはお別れとなり、ホストファミリーの皆さんはホテルまで私を送ってくれた。お別れの際、ホストマザーから包みを一つ受け取った。中を開けるとそこには一緒に撮った記念写真があり、ホストマザーがわざわざ現像に行き、フォトフレームにそれらの写真を入れてくれていた。こうした思いやりに私はとても感動させられた。次回日本を訪れた際にはまた彼らと出かけたいと思った。

インスタグラム上にホストファミリーのお兄さんからの投稿があり、自分に弟が一人できたとつぶやいていた。いつかまた彼らに会いたいと思った。最終日の歓送会には私たちを見送りに多くの人が駆け付け、中には子ども連れの人もいた。私たちは歌を歌い食事をし、その後会場を離れようとした時に、団員の一人が誕生日とのことでバースデーケーキが運ばれてきた。皆さんのそうした気配りはとても感動的で涙があふれた。

そして帰国の途に就く際、中島さんは涙し、私も涙した。皆と過ごした日本での 8 日間の体験、学びそして生活は私の一生の思い出となった。私自身これから両国の友好交流の使者として日中友好事業に自分なりの貢献をしたいと思った。

日　付： 12月1日（日）【6日目】
大学名： 外交学院
氏　名： 姜雅琦

朝起きると、ホストマザーが朝食の準備をしていた。その後食卓には手の込んだ西洋風の食器とともにサラダやサンドウィッチ、ヨーグルト、フルーツ等が並んだ。食事の際は西山さん夫婦と楽しくおしゃべりをした。その後西山さんの娘さんに会った。時間の関係で多くの交流はできなかったが、それでも彼女の優しさやフレンドリーさは感じることがで

きた。

朝食の後、西山さんとの「東京探索の旅」が始まった。特筆すべきは、西山さんはわざわざ事前にスイカにチャージをしてくれていたので移動がとてもスムーズだったことである。西山さんの気配りにとても感謝している。

幸運にもこの時期、江戸東京博物館では浮世絵展覧会を開催していた。私が興味を持っていると知った西山さんは両国にあるこの博物館の見学に連れて行ってくれた。そして私たちは多くの著名な作品を観賞した。私にとって間近での浮世絵鑑賞は初めてであり、多くの収穫が得られた。また展示されていた多くの作品は世界各地の有名な博物館から取り寄せたものでいずれも世界的な名画であり、そうした作品を一度に鑑賞できる機会が得られたことはとても嬉しかった。

昼食に美味しいラーメンを食べた後、私たちは江戸東京博物館の常設展示エリアを見て回った。そこでは江戸時代の様々な建物やライフスタイル等が紹介されていたため、私は江戸時代の歴史や文化について幅広く知ることができ、それを通じてより東京や日本への理解を深めることができた。

観光が終わり西山さんは私をホテルまで送ってくれた。この 2 日間の西山さん一家のおもてなしにとても感謝している。彼らから受けた御恩や温かさは一生忘れられないものとなった。

日　付： 12月2日（月）【7日目】
大学名： 北京大学
氏　名： 王遠非

今日は最終日の前日である。午前私たちはまず三菱 UFJ 銀行を訪れた。三菱 UFJ 銀行は日本でも最大規模の銀行の一つである。かつてドラマ『半沢直樹』を見たことがあったため、日本の銀行にはとても興味を持っていた。スタッフから三菱 UFJ 銀行の国内外における拠点や組織の現状についての紹介があり、タイ等の国では投資銀行も設置しているとのことであった。その他同銀行は中国とも多くの関係があり、日中国交正常化の前から中国とは通貨に関する合意が交わされていた。しかも、中国での多くの日系銀行における「最初」はいずれも三菱 UFJ 銀行であり、団員達は外貨管理、ブロックチェーン技術そして日本企業での業務や生活等について積極的に質問をし、多くの収穫が得られた。

お昼は日比谷松本楼で食事をとり、そして孫中山、梅屋庄吉両氏の感動的な友情に関する映像を見た。当時孫中山氏は国を守るための革命運動に力を入れており、梅屋庄吉氏は東アジアの国々が西側列強からの抑圧を受ける現状を憂い、中国をそうした状況から脱却させることを決意した。そうして梅屋庄吉氏は「君は兵を挙げたまえ、我は財を挙げて支援す」との言葉とともに孫中山氏の革命事業を支えた。これは実に感動的な革命の友情であり、日中両国においてより多くの人がこうした友好的な考えを持つようになれば、両国関係はきっとより長期的な発展をするだろうと思った。

その後、私たちは暫しの「帰国」をし、中国駐日本国大使館において今回の訪日活動に関する報告及び交流を行った。団員らの話からは、皆が多くの感想を持っていることが感じられた。そして日本の文化や制度等への踏み込んだ理解以外にも、現在の日中両国関係についての意見の発表とともに、メディアの中国に対する実情に合わない報道等の両国の友好を阻害する一部の問題についての指摘もあった。そうした中、参事官は私たちからの質問に率直な回答をされ、私たちは日中関係についてより深い認識を得ることができた。

夜は早稲田大学での交流と懇親会に参加した。全体的に京都大学での活動内容とさほど変わりはなく、日中双方の学生は人生プランや課外活動といったテーマに関して交流を深めた。懇親会では私たちは団歌を披露し、早稲田大学の学生からはお返しとして校歌が披露された。

明日は最終日であり、今回の活動が円満に終了することを願っている。

日　付： 12月2日（月）【7日目】

大学名： 北京大学
氏　名： 張一諾

今日最も印象深かった訪問先は松本楼であった。松本楼は梅屋庄吉氏と孫中山氏の革命時期の友好に所縁があり、また歴代の中国国家主席が日本訪問をする際の最初の目的地となっていた。私たちは今回そうした松本楼で食事をすることになった。松本楼に足を踏み入れるとすぐに古いピアノを見かけたが、それは孫中山氏の夫人である宋慶齢女史が日本滞在期間中に弾いていたピアノとのことであった。私たちは二階の宴会ホールで食事をとり、その間、梅屋庄吉氏の曾孫にあたる方からの梅屋庄吉氏と孫中山氏の友情についてのお話を拝聴した。この時私は初めて、当時孫中山氏が辛亥革命を起こした際に梅屋庄吉氏からの多大なサポートを受けていたことを知り、自身の財産を投げうって隣国の問題の解決を支援するという梅屋庄吉氏の行いに、これはどれほどの愛なのかと深く感動した。また梅屋庄吉、孫中山両氏の子孫は現在でも交流があり、共に日中友好に貢献をされている。

夜は早稲田大学での活動で再び日本の学生と交流することができた。この日の交流では人生プランや課外活動等についての討論を行い、日本の学生は私たちと似ている部分が多く、同じような悩みに直面していることに気が付いた。その時私は自分の学校に戻ったような感覚がした。言葉こそ完全には通じないが、私たちは互いに共通する感情を抱えていた。

日　付： 12月2日（月）【7日目】
大学名： 北京語言大学
氏　名： 牙暢

今日の午前は三菱 UFJ 銀行を訪れた。銀行のスタッフからは同銀行の概要や業務内容そして自身の業務における経験談等の紹介があった。そして、私たちからの様々な質問に対して丁寧な回答を頂いた他、日本での生活や日本語を専攻する学生の将来的な進路等に関するアドバイスも頂いた。それらを通じて私たちは銀行という業界、また三菱 UFJ 銀行について理解を深めることができた。

その後、日比谷松本楼で昼食をとり、さらに孫中山、梅屋庄吉両氏の革命時期の友情についてのお話を拝聴した。梅屋庄吉氏の辛亥革命におけるサポートには敬意を表するとともにとても感動させられた。日中両国の人々はより多くの交流や更なる理解によってより優れた協力関係や友情を構築することが可能であることは事実が証明しており、日本語を学ぶ私たちは、現在両国関係が好転に向かう中で双方の理解を深めるために各自の貢献ができると思っている。

松本楼での活動の後は中国大使館に向かい、暫しの帰国となった。大使館内では皆は家に戻ったかの様に気軽な交流を行い、今回の活動における収穫の紹介や疑問また問題点についての提起があり、参事官から丁寧な回答を頂いた。

早稲田大学での活動は非常に楽しく、皆は大学での日常生活や人生プラン等について交流を図り、楽しくお話できたと同時に両国の大学間の共通点や相違点についてより深く知ることができた。

日　付： 12月3日（火）【8日目】
大学名： 北京師範大学
氏　名： 張琬怡

今日は日本での最終日で、この日記は帰国の機内で書き終えた。

朝はまず私たちが宿泊したホテルニューオータニの見学を行った。日本でもトップクラスの有名ホテルであるホテルニューオータニは環境保護の面でもとても優れていた。生ごみを有機肥料に変える、野菜等の洗浄に使った水を浄化しトイレの洗浄用とする、自家発電により消費電力の一部を賄う、発電の余熱を水の加熱に使用する等の環境にや

さしいエネルギーの再利用からは、日本人の環境意識の高さに驚かされると同時にこれらの試みは私たち中国人が学ぶべきものだと感じた。またホテル内には日本庭園があり、そこではかつて教科書で見た「枯山水」を実際に目にすることができ、個人的にとても満足できた。

お昼は私たちの歓送会が開かれ、ホストファミリーの皆さんや日中経済協会の役員の方々も出席された。私たちは席上それぞれに今回の活動を通しての感想を述べ、さらに団歌を披露し感謝の気持ちを伝えた。私のホストファミリーが参加できなかったことは残念だったが、彼らへの感謝を伝えるために日本語と中国語の両方を使い手紙を書いた。また席上最も感動したのは、団員の一名がこの日丁度誕生日で、先生方がみんなには内緒でケーキを用意してくれたことであった。

今回の旅は忘れられないものとなったが、それは多くの知識を得たり見識を広めたりできたからだけではなく、それ以上に多くの心優しい人と知り合うことができたからであり、彼らは私たちの今回の活動のために苦労を厭わず、順調に進むように手配をしてくれた他、多くの心温まる瞬間を残してくれたのである。

この思い出はずっと大切にしていきたいと思う。

今回の活動に携わったすべての人に感謝すると共に、勇気を出して今回の活動への参加を申し込んだ自分自身にも感謝をしたい。

日　付：12月3日（火）【8日目】
大学名：中国伝媒大学
氏　名：江篠芊

A.Study System of Ecofriendly Hotel

現在、多くの日本企業は持続可能な発展に力を入れ始めているが、ホテルニューオータニはその中でも特に優れた取り組みをしている。私たちは同ホテルにおける生ごみを利用した肥料製造や野菜等の洗浄用水を活用したトイレの洗浄用水への再利用といったプロセス及び自家発電装置を見学し、それらの高効率性に驚かされた。小学生の頃から「水を多目的に使用する」との考えを学んでいるが、ホテルニューオータニはそうした考え方を実際に行動に移しており、私たちは学ぶべきだと思った。

B.Surprise and Impression

今日は私の 20 歳の誕生日で、また初めて海外で過ごす誕生日となった。有難いことにホテルニューオータニからケーキを頂いた他、皆さんからの祝福を受け、感動のあまり涙が止まらなかった。今日は多くのホストファミリー（一部子ども連れ）が歓送会に出席したが、残念ながら私のホストファミリーの鈴木さんにお会いすることはできなかった（5 人のお子さんがいる共稼ぎなので、来られない事情については理解している）。そして最後にバスに乗りホテルを離れる際、ホストファミリーの皆さんが私たちに手を振りお別れをする様を見て、私は再び涙してしまった。私は人と人との真摯で純粋な兄弟の情、そして国籍に関係なく、憎しみや損得がない純朴でまた自発的な共感というものに感動した。また礼儀の国の人々の影響を受け、日本において私はそれまで以上におもてなしの心を持ち、一人ひとりに対して誠実に向き合うようになった。8 日間の訪日の旅は一段落し、私は団歌の「いつでも何度でも」を思い出した。私は間もなく大海原の向こうに霞む場所に戻るが、時間がくれた出会いを信じているので、今回の思い出はずっと胸にしまい、日中友好に自分なりの最大限の貢献をするとともに、初心を忘れず「一生懸命」により良い明日に向かい努力していきたい。

日　付：12月3日（火）【8日目】
大学名：外交学院
氏　名：薛欽月